

藤原兼家（929～990年）が良源（912～985年）のために建立した寺院。藤原兼家は高位の貴族であり、986年には天皇の摂政に任ぜられる人物である。本尊は阿弥陀仏であり、念仏三昧のための道場として使われている。良源の弟子である源信（942～1017年）は世俗を離れた横川に籠り、修行と著述にはげんだ。寛和元年（985）、44歳の時、源信はここで仏教經典や論書などに記された阿弥陀如来の極楽浄土に関する文章を集めた『往生要集』を著した。全三巻のこの書物が浄土宗の基礎となった。源信は『往生要集』をもとに横川で組織された念仏者集団二十五三昧会の指南をし、彼らのために『二十五三昧式』を撰述したとされる。また「六道十界ノ図」や「阿弥陀来迎ノ図」などの仏画作成を通して、地獄や極楽のイメージを日本人のなかに定着させた。源信は恵心堂に住んでいたため、恵心僧都と尊称された。